

バッハ コレギウム ジャパン
J. S. バッハ:《ミサ曲 ロたん調》

2026年 7 月 20日 月曜祝日
16 時から 18 時20分まで 途中 20 分の休憩あり
会場: さいの国さいたま芸術劇場 音楽ホール

これは、読み上げ対応用の文字プログラムです。

主催:公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団、
助成:
文化庁文化芸術振興費補助金(括弧 劇場・音楽堂等機能強化推進事業) 独立ぎょうせい法人日本芸術文化振興会、

プログラム:

J. S. バッハ(括弧 1685年生まれ1750年没)、

「ミサ曲 口たん調」 バッハ作品番号232、

第1部: ミサ(括弧キリエ、グロリア)、

第2部: ニケーア信きょう(括弧クレド)、

第3部: サンクトゥス、

第4部: オザンナ、ベネディクトゥス、アニュス デイとドナ ノビス パーチェム、

第1部と第2部の間に 20 分の休憩がはいります

(プログラム終わり)

出演者:

指揮:すずき まさあき、

独唱:

ソプラノ1:まつい あき、

ソプラノ2:やすかわ みく、

アルト:アレクサンダー チャンス、

テノール:さくらだ まこと、

バス:ティモシー エドリン、

合唱と管弦楽:バッハ コレギウム ジャパン、

合唱:

ソプラノ1:

まつい あき、
さくらい あいこ、
しみず こずえ、

ソプラノ2:

やすかわ みく、
ふじい れな、
ふじさき みなえ、

アルト1,2:

アレクサンダー チャンス、
あおき ひろや、
たかはし ちはる、
ふせ なおこ、

テノール1,2:

さくらだ まこと、
かがみ たかゆき、
たにぐち ようすけ、
みずこし さとし、

バス1,2:

ティモシー エドリン、
こいけ ゆうすけ、
やまもと ゆきひろ、
わたなべ ゆうすけ、

管弦楽:

トランペット1,2,3:

さいとう ひでのり、

おおにし としゆき、

かねこ みほ、

ティンパニ:

すがはら あつし、

ホルン ダ カツチャ:

ふくかわ のぶあき、

フラウト トラヴェルソ1,2:

すが きよみ、

まえだ りりこ、

オーボエ、オーボエ ダモーレ1,2:

さんのみや まさみつ、

あらい ごう、

オーボエ3:

もり あやか、

ファゴット1,2:

むらかみ ゆきこ、

こうふ ゆき、

ヴァイオリン1:

てらかど りょう (括弧コンサートマスター)、

やまぐち ゆきえ、
あらき ゆうこ、

ヴァイオリン2:
わかまつ なつみ、
たかだ あずみ、
はらだ あきら、
ひろみ しほ、

ヴィオラ:
なりた ひろし、
あきハ みか、

[コンティヌオ(括弧つうそう低音)]:

チェロ:
やまもと とおる、
しまね ともふみ、

ヴィオローネ:
こんの たかし、

オルガン:
おおつか なおや、

チェンバロ:
すずき まさあき、

(出演者一覧終わり)

曲目解説:なかがわ いくたろう、
J. S. バッハ:《ミサ曲 口たん調》 バッハ作品番号232、

《ミサ曲 口たん調》は、作曲家ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(括弧1685年生まれ1750年没)の後半生、約15年の間にまとめられたが、成立史全体は生涯のより長期間にわたる。

バッハはおないどしのヘンデルとは異なり、現在の中部ドイツ地域を生涯離れることなく、同地で育ち、学び、活動した。そして、マルティン ルター以来200年にわたって同地に根づいていた福音主義ルター派教会の音楽の務めに生涯の大半を捧げた。そのバッハがなぜ、ローマ カトリック教会の典礼「ミサ」のための通常文(括弧 季節や祝日に関係なく毎回唱えられる賛歌の言葉)に作曲し、「ミサ曲」を完成させたのだろうか？

宗教改革者ルターは、決して典礼としての「ミサ」そのものを否定したのではなく、それが「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」とりおこなわれる事を望んだに過ぎない。ルター派教会においても、ミサ通常文 最初の二章 キリエとグロリアは、「ミサ・ブレヴィス(括弧 短縮ミサ)」として歌われることがあり、この形のバッハの作品も四曲(括弧 バッハ作品番号 233から236) 遺されている。

ミサ通常文は、I : キリエ(括弧 あわれみの賛歌)、II: グロリア(括弧 栄光の賛歌)、III: クレド(括弧 信仰宣言)、IV: サンクトゥス(括弧 感謝の賛歌)、V: アニュス デイ(括弧 平和の賛歌)の五つに分かれるが、《ミサ曲 口たん調》の自筆譜は各曲の成立年代から以下の4つのファシクル(括弧 : 冊子のこと)に分けられている。

- 1: ミサ(括弧、キリエおよびグロリア)、
- 2: ニケーア信きょう(括弧、クレド)、
- 3: サンクトゥス、
- 4: オザンナ、ベネディクトゥス、アニヌス デイとドナ ノビス
パーチェム、

第1のファシクル「ミサ」の作曲動機ははっきりしている。
1733年、バッハがドレスデンのザクセン選帝侯に「宮廷作曲家」の称号を請願した際、請願書に添付された音楽がこのキリエとグロリアだった。ザクセン選帝侯は17世紀末のアウグストきょう王の改宗以来、代々カトリックであった。

「ミサ」はキリエ 3曲、グロリア 9曲からなり、バッハ自身の他のミサ・ブレヴィスより規模が大きい。各曲の様式も実に多彩であり、「対位法の巨匠」バッハの矜持を示すフーガをはじめ、ルネサンス期の様式、スティレ・アンティコによるポリフォニー(括弧、多声)音楽から、1730年代の最先端のコンチェルト、さらにバロック オペラ様式の技巧を凝らしたアリアまでが、ミサ通常文をあざやかに彩る。

第2、第4のファシクルが整えられたのはバッハの最晩年、1748年8月から翌49年10月の間とされる。この期間にミサ通常文のクレド以降が、バッハ自身の旧作からの転用も交えて編纂された。

同じ時期に第3ファシクルとして、1724年のクリスマスにライプツィヒで演奏された、「サンクトゥス」が改訂されて加えられる。

第2ファシクル「ニケーア信きょう」は、グロリア同様9曲からなる。少し細かく見てみることにする(括弧内に、かし対訳にしたが

って全曲の通し番号を示す)。

第1曲(括弧 13)〈クレド イン ウーヌム デウム〉は、グレゴリオ聖歌の「クレド」旋律をテーマとしたパレストリーナ風のはっせい(括弧 五部合唱+ヴァイオリン二部+つう奏低音)のポリフォニー。しかしアタッカで続く第2曲(括弧 14)〈パトレム オムニポテンテム〉にはカンタータ第171番の第1曲が転用されており、協奏フーガによるずっと新しい様式の音楽となる。

第3曲(括弧 15)〈エト イン ウーヌム ドミヌム〉では、ソプラノとアルトの二重しょうからキリストに対する信仰告白が始まる。ここから音楽は歌詞に沿ってイエスの生涯を回想し、第4曲から第6曲(括弧 16～18)で合唱曲が三曲続き、「しよじょかいたい」、「十字架」、「復活」、の出来事をそれぞれ歌う。この部分が「ニケーア信きょう」の心臓部である。

父、子、に続き、聖霊への信仰告白が第7曲(括弧 19)〈エト イン スピリトゥム サンクトウム〉のバスのアリアで歌われたのち、第8曲(括弧 20)〈コンフィテオル〉は、水を思わせるつう奏低音の動きに、グレゴリオ聖歌旋律による合唱ポリフォニーを乗せて、洗礼について歌う。やがて死者のよみがえりを待ち望むかしに達すると、合唱はホモフォニック(括弧 和声てき)になり、翳りを帯びた和音が予測できない未来へのおそれを歌うが、最終曲(括弧 21)〈エト エクスペクト〉では同じかしが明るく全音階的に歌われ、「待望」は「確信」に変わる。

この「ニケーア信きょう」は当初全8曲であり、第3曲の二重しょうで「しよじょかいたい」の出来事までが歌われて、そのまま「十字架」の合唱へと繋がっていた。だが「ニケーア信きょう」全体を完成させたバッハは、いま一度かしの配分を見なおし、「しよじょかいたい」、すなわち神の子イエスの「受肉」の出来事を、合唱曲(括弧 16)〈エト インカルナートゥス エスト〉として独立させた。ために、この〈エト インカルナートゥス エスト〉こそが作

曲家バッハの生涯最後の作品であると、ディートハルト ヘルマン(括弧 指揮者、音楽学者。元 新バッハ協会副会長)は指摘していた。

続く合唱曲(括弧 17)〈クルツィフィクスス〉はぜん曲とは反対に、《ミサ曲 口たん調》に転用されたバッハ自身の作品の中で、最初期の1714年に書かれたカンタータ第12番《なき、嘆き、憂い、おびえ》第1曲が転用されている。この世の悲惨さの極みとして「十字架」を歌う合唱曲が中心に置かれたことで、「ニケーア信きよう」全体がイエス・キリストの「十字架」を中心とした、明確なシンメトリー(括弧 左右対称)構造をとることになった。

バッハが最晩年に、「ミサ通常文にあえて作曲し、《ミサ曲 口たん調》を完成させた」理由、それは「ニケーア信きよう」の音楽、ことにその改訂の経緯からおのずと浮かび上がってくる。彼は、キリスト教教理の核心である「イエス・キリストとは、なにものか」という、初代教会以来繰り返されてきた問いに、いま一度、より普遍的な言語(括弧、ラテン語)と音楽とをもって向き合おうとしたのではないか。だからこそ彼は「ニケーア信きよう」、いな、《ミサ曲 口たん調》全体に、自らの活動を通じて得たあらゆる時代の音楽様式、作曲技法を注ぎ込み、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」まとめ上げた。

〈サンクトゥス〉から〈ドナ ノビス パーチェム〉に至る第3、第4ファシクルを含む全曲を、生前のバッハが耳にすることはついになかったが、彼は第1ファシクルの(括弧7)〈グラツィアス〉(括弧、カンタータ第29番・第1曲の転用)と同じ音楽による最終曲(括弧 27)〈ドナ ノビス パーチェム〉をもって《ミサ曲 口たん調》全体を明確に統一し、「時代を超えて賛美を受ける者」としてイエスの姿を映し出した。これこそが「イエス・キリストとは、なに

ものか」という問いに対する、音楽による彼なりの答えでもあったと言い得よう。

(曲目解説終わり)

出演者プロフィール:

すずきまさあき、指揮、
1990 年〈バッハ・コレギウム・ジャパン(括弧 BCJ)〉を創設。グループを率いて欧米の主要なホール、音楽さいに度々登場しており、雄弁かつ透明なサウンド、本質に迫る演奏アプローチで、極めて高い評価を積み重ねている。録音も多く、J. S. バッハのカンタータ全曲および受難曲やミサ曲など全てのせいがく曲の CD 録音を達成した。

また独奏では、J. S. バッハのチェンバロ作品全曲を録音し、現在は『J. S. バッハ:オルガン作品全曲』が進行中である。

近年は国内外のシンフォニー・オーケストラとも活発に共演し、多彩なレパートリーを披露。2001 年 ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章。2012 年 バッハの演奏に貢献した世界でき音楽家に贈られる「バッハ・メダル」、ロンドン王立音楽院・バッハ賞を受賞。13 年度第 45 回サントリー音楽賞を BCJ と共に受賞。2015 年 ドイツ・マインツ大学よりゲーテンベルク教育賞、2021 年 Royal College of Organists より RCO メダルを受賞。イエール大学アーティスト インレジデンス、神戸松蔭大学客員教授、東京芸術大学名誉教授、オランダ改革派神学大学及びジュリアード音楽院より名誉博士号授与。

バッハ コレギウム ジャパン、合唱と管弦楽、

1990年 鈴木雅明により創設。音楽監督に鈴木雅明、首席指揮者に鈴木まさとを擁する。世界各国から集まる古楽のスペシャリストとともに、オリジナル楽器を用いてバッハを中心とした音楽遺産の理想的上演を目指し演奏活動を行う。多数のCD録音が高い評価を受けるほか、BBCプロムスやカーネギーホールなど世界中で活発な演奏活動を展開。2022年 秋の9都市を巡る欧州公演、23年6月のライブツィヒ・バッハ音楽さいフィナーレへの招聘、24年8月BBCプロムスへの招待など、日本のみならず世界の音楽シーンを牽引している。18年の年月をかけて完成した『バッハ：教会カンタータ全曲シリーズ』は、世界的にも貴重な成果として注目を浴びた。2020年 上演のヘンデル《リナルド》公演が第19回佐川よしお音楽賞を受賞。25年1月、鈴木まさと指揮による欧州公演も各地で満じょうの聴衆に迎えられ、高い評価を得た。

まつい あき、ソプラノ、
岩手県出身。東京芸術大学大学院博士課程修了、博士号しゅとく。日仏声楽コンクール、日本ドイツ歌曲コンクール優勝。在学ちゅうよりBCJの主要メンバーとして国内外の公演や録音に多数参加。2020年ケルンでの《ヨハネ受難曲》全世界配信や2022年欧州ツアーでの《ミサ曲 口たん調》でのソリスト歌唱は絶賛を博した。NHK交響楽団をはじめ主要楽団との共演も多く、バロックから現代まで時代を自由に横断するレパートリーを持つ。透明感溢れる歌声と緻密な楽曲理解に基づく知的な歌唱が広く支持されている。東京オペラシティ文化財団主催リサイタルシリーズ「B to C」、東京・春・音楽さい、霧島国際音楽さい、調布国際音楽さい、NHK-BS「クラシックくらぶ」、NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」など出演。

やすかわ みく、ソプラノ、
くにたち音楽大学、東京芸術大学大学院を経て、英国ギルドホール音楽院で学ぶ。Gold Medal2023ファイナリスト。これまで、バッハ・コレギウム・ジャパン、とうきょう、日本フィル、関西フィル、シティーフィル、新日本フィル、中部フィル、ときょうなどの国内主要オーケストラ、国外ではボーンマスきょう、バーミンガムきょう、パドルー管弦楽団、マカオ管弦楽団などと共演。今春にはオランダバッハ協会の《マタイ受難曲》で14公演のツアーに客演。オペラでは英国のHurn Court Opera 《ドン・パスクワレ》ノリーナ役でデビュー。同年に刊行されたOpera Now Magazineでは最高評価の五つ星を獲得した。バッハ・コレギウム・ジャパンと共演した『ドイツ・レクイエム』はBIS RecordsよりCDがリリースされた。

アレクサンダー チャンス、カウンターテナー、
1992年ロンドン生まれ。オックスフォード大学ニューカレッジに学ぶ。オペラおよびコンサートで確固たる評価を築いており、ルネサンスのリュート歌曲、バッハのオラトリオ、ヘンデルのオペラから、20世紀オペラ作品や新作委嘱作品に至るまで、幅広いレパートリーで精力的に活動している。ガーディナー、鈴木雅明、鈴木まさと、ヤーコプス、ジョン バット、リオネル ムニエといった古楽界を代表する指揮者と共演しており、グラモフォン誌から「同世代で最も刺激的な英国人カウンターテナー」と評された。2022年には、国際ヘンデル声楽コンクールにおいてカウンターテナーとして史上初の優勝をはたす。デビューCD『Drop not mine eyes』は、グラモフォン誌「2023年ベスト・アルバム」に

選出された。BCJとも日本、欧州ツアーで共演を重ねており、特に24年夏のBBCプロムスを含む欧州ツアーでは、各地で絶賛された。

さくらだ まこと、テノール、
東京芸術大学大学院修了後、と伊。イタリア各地でモンテヴェルディ作品出演の他、《オルフェオ》初演400年では世界的なヴィオラ ダ ガンバ奏者J・サヴァールらのグループとエジンバラ音楽さい等で共演。国内でもサヴァリッシュ指揮NHK交響楽団をはじめ数多くのオーケストラや古楽アンサンブルと共演。バロックから古典派をレパートリーに国際的に高い評価を得ており、BCJでは鈴木雅明氏の厚い信頼のもとたびたび《マタイ受難曲》エヴァンゲリストを務めている。NHK「クラシックくらぶ」「ベストオブクラシック」出演。第27回イタリア声楽コンコルソ、シエナ部門たい賞受賞。ブルージュ国際古楽コンクール第2位(括弧 声楽最高い)。東京芸術大学教授。二期会会員。

ティモシー エドリン、バス バリトン
イギリス出身のバス バリトン。カンタベリー大聖堂の聖歌隊員として音楽の手ほどきを受け、そのご、ロンドン英国王立音楽大学に学ぶ。オペラに精力的に取り組み、ドルトムント歌劇じょう、ヴッパータール歌劇じょう、ブレーマーハーフェン市立劇じょう、ロンドン ヘンデル フェスティバルなどに度々登場しており、2025～26シーズンにはアン デア ウィーン劇場でのデビュー公演が予定されている。コンサートおよびリサイタルの分野でも、ロンドン ウィグモア ホール、ボストン シンフォニーホール、バルセロナ・カタルーニャ音楽堂、ケルン・フィルハーモニーなどにソリストとして出演、各地で高い評価を得ている。鈴木雅明と

はバッハ・バルセロナ音楽さいにて共演。BCJとは今回がはつ共演となる。

(主な出演者プロフィール終わり)